



当日は強風の中、雨がぱらつく肌寒い日。少々、悪天候ともいえる中での開催でしたが、定員 50 名強の方が来場されました。

第一部の講座では「北海道・北東北の縄文遺跡群」世界遺産登録 5 周年を記念して、海と縄文人の視点で講座が展開されました。



海から北黄金貝塚を見つけ眺める
(噴火湾から伊達市北黄金貝塚を探しています。)

公開講座) 海と縄文人

講師: 縄文世界遺産研究室室長 越田 賢一郎先生



「人類にとって海は大変な障壁。しかし海との付き合いの大切さは縄文時代と(今の時代も)変わりません。」

「海を越えた霊長類は、人類以外にいない」ということを伝えられなければ、日常では考えもしないことです。海を越えて初めての大地へ。ホモサピエンスが拡散して個々に移動し、それぞれの場所で、今に至る気候と植生の変化に対応して生き抜いてきたのです。旧石器時代から縄文時代の人々を取り巻く環境の話題から話が始まりました。

「地球のどこかに氷河が存在すれば、氷河期とよばれます。すると、現代は、260 万年前から始まった 5 番目の第 4 紀氷河期になるのです。」という解説に、自分が生きている温暖化の時代でも氷河期だと知って驚いた、との受講者の声が寄せられました。

海辺の生活に見られる「貝塚」も、歴史の授業で成り立ちを聞くことはあっても、果たした可能性のある役割を今回初めて知った人は多いのではないのでしょうか。生きる上での知恵として、「貝塚」にはある機能を持たせていたという説は興味深く聞くことができました。縄文時代の人々の思い付きや行動には、昔の人々が何を大切にしていたのか、今を生きる自分達でも想像できる内容でした。今とそれほど変わりのない思いを持ってその地に定住し生活をしてきたのだ、ということに気がついたことでしょう。

また海を介して縄文の人々が、思いがけないほど幅広く他の地域との交流があったことも示されました。その証拠として出土された貝殻製品を解説するスライドに、驚きを持って受け止め、厳しい海を越えての交流に至る理由を考えて、新たな疑問を持った受講者もいたようです。

講座の終わり、現在の自然環境と歴史が守られていくことは一対のものであると示唆されます。「海を守り未来へ引き継いでいくことが私たちに課せられた大事な使命」、「人類視点に戻る大切さ」を語られて幕となりました。



勾玉づくりワークショップ



ワークショップ講師: 同研究室学芸事務員 渡井瞳さん

「参加の皆さんは、色々な経験を積んだ大人だからこそ、コツを掴むとみるみる作り上げていきました！」とは渡井学芸事務員による皆さんへの講評。

1 時間半という短い枠での作業でしたが、1 時間少々を過ぎた頃から完成された方もちらほら。勾玉らしい曲線美を作り出すために丹念に磨く方。「削り過ぎたので(今月末の)学祭でリベンジします」と苦笑しながら話す方。出来上がった勾玉を身に着けてご満悦の方。勾玉を見せ合い、どんな方にも「似合うよ!」と声をかけてくださる方。自分の作った勾玉をみつめて「大切にします」と微笑んでつぶやく方。持ち帰る楽しみもあり、皆さん充実の時間だったようです。

縄文人になったつもりで勾玉を作る時間は、皆さんにとって心豊かなものになったことでしょう。

受講後のアンケートでは、講師や学生への丁寧な説明と作業をする受講者へのサポートに感謝の言葉をいただきました。(ありがとうございます!)

参加された皆さんそれぞれに、縄文人を取り巻く世界を想像して思い馳せ、ワークショップでは縄文人の気持になって勾玉を精魂込めて作り上げました。

充実の午後のひとときを楽しまれたようで、何よりでした。

